

中国起源の神

—盤古—

廣 田 律 子

はじめに

「大和国高取領風俗問状答」によれば、近世期大和国平群郡東安堵村の鎮守は牛頭天王を祀り、毎年正月元旦から3日まで、神前で篝火を焚き、松明を振って巨旦大王を疫神の代表として疫神追伏の祭儀を行っていた事が見える¹。日本でも邪悪な存在を調伏する儀礼が行なわれていた事がわかる。

現在伝承されている牛頭天王に関わる神事芸能を見ると、荒ぶる疫神として牛頭天王・天刑星・スサノウが一体化している²ののだが、巨大な力を持つ神霊を招き、慰安して、守護霊に変え、その威力で荒ぶる神霊を封じようとした事が伺える³。

岩田勝は『神楽源流考』において神事芸能の一形態として挙げる⁴が、宗教者は祭文や祝詞を誦む事によって祭儀の場に神仏や精霊を顕現させて舞わせるが、祭文を誦む事で、悪霊を鎮め、強制する事が出来るとしている⁵。

この祭文には牛頭天王をはじめとして荒ぶる神々の名が並べられる。中でも五龍王祭文や土公祭文等といわれる祭文には、中国の創世神話に登場する盤古に関連する神名が見え、荒ぶる神々と関連づけられて述べられている。すでに岩田勝が文献資料や中国地方各地の祭文や高知のいざなぎ流の祭文、奥三河花祭りの祭文等について丹念に収集分析を行なっている⁶。この足跡を追いつつその他の資料も加えて盤古の名が見える例を以下に整理し、更に本稿では中国から流入した盤古が日本においてなぜ荒ぶる神と関係した立場に置かれているのかについて考

察を進めたい。

第1章 神事芸能を中心とする盤古の足跡

以下に神事芸能資料の事例を挙げる。

I. 筑前玄清法流盲僧琵琶史料の「天地開闢地神大陀羅尼經」には、飢呉大王と国常立尊と一体化した大日如来が誓願を發して天地開闢を成就したとある⁷。

玄清流との関係については定かではないが、対馬において1980年代まで活動していた盲僧の扇徳進の荒神祓いに唱えられる祭文『荒神經』に王子の釋が含まれる⁸。天竺のバンゴ大王に5人の王子があったが、一郎東方春、二郎南方夏、三郎西方秋、四郎北方冬と四方四季を所務分けするが、五郎には分配せず争いになった末、五郎は中央と土用を支配する事で鎮められるというものである。

II. 広島県山県郡壬生井上家蔵天文一三年(1544年)「山伏史料」⁹は、五龍王・十二月将・陰陽道・密教の神々を勧請し、その靈威によって悪霊を鎮め、災難を祓って貰う事を意図して誦まれると岩田勝が解説する。倭牛王は日月大地を作り、左の眼を日とし、右の眼を月とし、東方七里、南方七里、西方七里、北方七里を作り、自分の身体から種々な物を作ったとある。

III. 広島県廿日市市宮内山田家蔵文明九年(1477年)の「五龍王祭文」は、後世の土公祭文の原型とされる¹⁰。盤古大王の太郎東方青龍王、二郎南方赤龍王、三郎西方白

龍王、四郎北方黒龍王、五郎中央黄龍王、の5人の王子が所務争いをする。大王の没後に生まれた五郎の王子には所務がなかったからである。文撰博士が仲介に入り、王子達の血の色が青赤白黒黄であるので大王の子として間違いないとし、それぞれ、王子達に四季と日月の所務分けを行なう。

IV. 広島県山県郡壬生井上家蔵延宝七年(1679年)「大土公神祭文」¹¹には、盤言大王が大海を7日7夜搜して秋津嶋に渡り、5人の妻、東方に青帝青女、南方に赤帝赤女、西方に白帝白女、北方に黒帝黒女、中央に黄帝黄女をもち、それぞれ10人(十干)12人(十二支)12人(十二客)9人(九凶)45人(四十五禁忌日)の御子をもうけたとある。盤言大王は七千万歳の8月1日に死んだが、死後生まれた五郎の王子と上の4人の王子とが争った後、所務分けを行なうとある。

V. 愛知県豊根村古真立の鈴木家蔵の「大土公神之祭文」¹²には、ばんごん王とその子太郎木神は東方甲乙、二郎火神は南方丙丁、三郎金神は西方庚辛、四郎水神は北方壬癸の国を譲られ、ばんごんの死後生まれた五郎の姫と争いとなるが、もんぜん博士の仲立ちにより一年の棲み分けをすとある。

VI. 愛知県振草村中設楽岡田家蔵の元禄一三年(1653年)「大土公神祭文」¹³には、番古大王が見え、まず4人の子が生まれ、番古大王は八万四千余歳で死に、左の目が日に右の目が月となり、その後5番目の姫が生まれ、上の4人と争い、文ぜん博士の仲立ちで1年の棲み分けをする。

この祭文はV例と同様、神楽において行なわれた土公神祭の中で誦まれ、平行して鎮めの反閤が行なわれたと岩田勝は解説している¹⁴。また岩田は5人の王子に形象化された土公は、祀らなければ崇りをする地霊であり、司霊者が誦む祭文ではやし舞わされて、鎮送されるが、態よく守護霊化される霊格であると述べる¹⁵。

また花祭りの反閤には、五足・七足・九足の足踏があり、「盤古・大王・乾良・地神・王」の五足、「青・黄・赤・白・黒・盤古・大王」の七足、「臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前」の九足とされ、盤古が見える¹⁶。山本ひろ子によれば、反閤は、「土公神から土地を譲り受けるに際し、マジカル・ステップで地霊を踏み鎮める一方、土公神経を誦することによってその威力と加護を仰ぎ、祭場での行事の恙ない成就を祈念する儀礼と考えられる。」¹⁷とする。

VII. 広島県甲奴郡上下村八幡社司の弘化二年(1845年)の書の「土公神祭文」¹⁸は、弓神楽の中で誦まれていたとされる。伴五大王が現われ、王子4人、姫宮4人が生まれ王子4人に四方四天を譲って幡を与える。伴五大王は250歳で死に、死後5番目の王子が生まれる。5番目の王子と上の4人の王子とは所務争いをし、文撰博士の仲立ちで、所務分けをする。

基本的に内容を一にし、地霊の土公を祭り上げ、送り鎮める同系統の祭文の例は、比婆郡西城町大佐御崎家蔵「五行霊土公神旧記」、甲奴郡上下町上下小川家蔵「土公神延喜祭文祓」等が伝承されている¹⁹。

VIII. 備後は荒神神楽においても、大王立ちと称して、盤古大王が太鼓の上に座して長々と祭文を誦む場面があると牛尾が紹介している²⁰。備後を中心に、「王子舞」「王子神楽」「五神納め」「五行祭」「五行舞」「幡分け」などと称され、盤古大王(磐古大王)が登場する。天地開闢から始め盤古が生まれ、250歳で死を迎えるにあたり、一郎・二郎・三郎・四郎の4人の王子に東西南北の四方四天、四季等を分ける。胎内の5番目の王子に形見を残し、天に昇り日の若宮に鎮まる。生まれた五郎は兄王子達と所務争いをするが、門尋博士(文撰博士)が仲介者となり所務の分配がされる²¹。田中重雄により、竈の神の土公神を祀るための土公祭文を神楽に編成したとする五行祭(王

子)に行なわれる、盤古大王の入念な語り
の様子が報告されている²²。備後、比婆郡
東城町戸宇の朽木家蔵の「神道祭文」²³は、
奥書から元禄八年(1695年)正月吉日に朽
木薩守秀治が書写したもので、「謹請東方
青帝龍王木神王木姓旦那守給◇謹請南方赤
帝龍王火神王火姓旦那守給◇謹請西方白帝
龍王金神王金姓旦那守給◇謹請北方黒帝龍
王水神王水姓旦那守給◇謹請中央黄帝龍王
土神王土姓旦那守給(◇は空白。以下同様。)
」と、東南西北中央の五竜王を呼び出す章
句から始まる。「抑土公之御本地ヲ申セハ
◇昔ノハジメノ王ハ欽明天王◇其末ヲハ延
明天王◇其末ヲハ延セイ王◇其末ヲハシ、
キヤウ王◇其末ヲハ番語大王ト奉申◇抑天
門開ケ地門定リ◇尔時天通地通五軀五龍王
◇天照太神◇文撰博士ハ天地ノ主ナリ」天
地開闢の番語大王が見え、その後五龍王
の所務分けと続く。この祭文を長大化し文
芸化の跡が著しいとされる²⁴朽木家蔵「土
公祭文」²⁵がある。筋は、磐古大王が後の
宮と結ばれ、4人の王子4人の姫宮をもう
ける。王子4人に四方四天を譲り250歳で
伏す。「左の御目を日にげんじ右の御目を
月とげんじ◇十二のあばら骨をば十二の月
の頭とげんじ◇三十二そふのはぐきの本を
ばゑとしかんとげんじ◇三百六拾六のつぎ
ふしをば三百六拾日の日数とげんじ」とあり、
磐古大王の死後左目が日に右目が月にな
る他あばら骨、齒茎、節が12ヶ月十十二
支日になったとする。死後5人目の王子
が生まれ、兄達と所務争いをし、文選博士
の仲介で5人それぞれ所務分けが成るとい
う内容である。

- IX. 対島の法者頭であった蔵瀬家蔵『願物語』
と『星物語』は死者供養で唱えられたとさ
れる²⁶。盤古大王は目連尊者の父とされ、
目連尊者は父の死後生まれる。母は上躰后
で、大変な吝嗇家で、蔵に海山川の産物等
を蓄えるが、神仏に供養をしない。盤古大
王が上躰後の所行を改めさせようとするが

応じない。つわりの為悪食を行なう。目連
尊者が産まれると、捨ててしまうが、目連
尊者は拾われ、仏の弟子となる。母が地獄
に墮ち、救おうとし星を巡る。外来の盤古
と目連尊者が親子として結びつけられ、霊
を鎮める場に唱えられる祭文に登場する。

- X. 高知県物部村いざなぎ流で誦まれる「大
土公祭文」²⁷には、日本が滅びたと報告さ
れ、西天竺の父ばんごん大王様は自ら様子
を見に来るとある。島を作り、山を作り、
日月の將軍を岩戸から引き出し、昼夜の別
を付け、四節の区別を付け、太郎、二郎、
三郎、四郎の王子に割り当て、2月と8月
の彼岸を二人の姫に受け持たせたとある。
父ばんごん大王様は、581歳の時に死に、
その後五郎は4人の兄と所務分けを争う。
高野上人おじじよもんが争いを鎮め、五郎
にも割り当てをするとある。

「土公祭文」には荒神の出生について、
番権大王の太郎王子は東方春荒神、二郎王
子は南方夏荒神、三郎王子は西方秋荒神、
四郎王子は北方冬荒神、五郎王子は大荒者
なれば大地を枕に天を踏まえ土用を領して
鎮まるとあるとする²⁸。

第2章 その他の文献に見える盤古

文献に見出せる盤古の記述を見てみる。

- I. 天台宗妙法院所蔵神像絵巻一卷(観応元
年1350年)に盤古王、五帝龍王、牛頭天王
等の神像図がある²⁹。盤古王は木の字と扨
子を持ち、青帝が剣と索、赤帝が筆と巻物、
白帝が長柄の三叉戟、黒帝が長短両柄の三
叉戟、黄帝が長柄の三叉戟と剣を持ち、そ
れぞれ武神の出で立ちをしている。「書云」
として「盤古の時、天地混沌として清濁分
かれず、死後始めて開闢あり…中略…左眼
は日となり、右眼は月となり…」とあり、
盤古による天地開闢と死体化生が述べられ
ている。

盤古王と五帝龍王の説明には、盤古王は

五人の妻をもち、各々青赤白黒黄の五帝龍王を生ませたとある。

- II. 吉田兼俱(1435-1511)は、『日本書紀神代抄』日本書紀卷第一 神代上 天下經營段に「一書曰素戔嗚尊曰韓郷一中略—三五曆記磐古大皇以毛髮爲草木云と、^(傳)盤古即素戔嗚也、^(傳)」とし、盤古大皇の毛髮が草木になり、スサノオは盤古であると解説している。

吉田兼俱は、儒教・仏教・道教などに精通し吉田神道の教理・教学を打ち立てた人物である³¹。吉田兼俱が論の根拠とする『三五歴記』だが、唐代の『芸分類聚』に三国時代の徐整の『三五歴記』が引かれている。

天地が渾沌として鶏の卵のようであったときに、盤古はそのなかに生まれた。一万八千年たって、天と地が分かれ、軽くて透き通っているものがゆっくり登って行って天になり、重くて濁っているものがゆっくり沈んで行って地になった。盤古の体はそのなかで一日に九回も大きな変化が生じ、天や地よりも神聖になった。天は一日に一丈ずつ高くなり、地は一日に一文ずつ厚くなり、盤古も一日に一丈ずつ背が高くなり、こうして二万八千年たった。天はますます高くなり、地はますます厚くなり、盤古はますます大きくなった。その後、三皇が現れた。数は一から始まり、三で立ち、五で定まり、七で盛んになり、九に止まる、それゆえ天は地から九万里離れた³²。

とある。ここからはなぜ吉田兼俱が盤古をスサノオとしたかは不明である。また盤古の毛髮が草木になったという記載は、明代の董斯張『広博物志』に引く『五運歴年記』に見える。『三五歴記』は多くの版本が存在していると考えられているので、吉田兼

俱の入手したものには、盤古の毛髮が草木になったという内容やスサノオと比例出来る事柄が含まれていたのかもしれない。いずれにせよ、室町期にはすでにスサノオは盤古と習合して考えられたのである。

さらに吉田兼俱の『中臣秘抄』の第一神孫降臨章の「荒振神達」の頭注に「荒振者、素戔、大己貴、事代主等類也。則荒神、是也。」³³とある事から、スサノオは荒ぶる神とされており、盤古もまた荒ぶる激しい崇りやすい神と考えられていたと想像できる。外来の神は恐ろしい神とされる傾向にあるといえる。

- III. 脇田修が紹介するように³⁴室町中期に作られ、寛永一二年(1635年)に刊行されたとされる桂林徳昌の『燈前夜話』に「盤古皇ハ吾朝ノ素戔嗚尊也、天竺祇園精舎ノ鎮守ハ日本ノ祇園是也」とある³⁵。盤古は牛頭天王と素戔嗚命と習合しており、すでに通説とされている。

- IV. 河原巻物の例を二例挙げるが、「河原由来書」は、大宝元年(701年)と紀年されるが、これにも判護天王が登場する。天竺毘舍利国の王子として判護天王の子縁太羅王子が生まれ、それが河原の先祖とされる。判護天王は牛頭天王と習合し、素戔嗚命とも同一視される神であると脇田修は論じている³⁶。脇田によれば、中世説話の世界では、異国から威力のある神が渡来する事は不思議ではなく、縁太羅王子が先祖であるのはこの系列に属しているという。また異国の貴種を先祖とした点が「河原由来書」の第一の特色とする³⁷。「長吏系傳卷」には元暦元年(1184年)と紀年があるが、やはり長吏の由来は判護大王とされる³⁸。

- V. 鎌倉末から南北朝に陰陽道の影響下に成立したとされる『三国相伝陰陽輶轄篋篋内伝金烏玉兔集』(『続群書類従』第三一輯上³⁹所収)では、盤古は盤牛王とされ天地開闢神話と死体化生神の盤古の性格は引き継がれている。その上で大梵天王、堅牢地

神、大日如来と結び付け称され、五官を構えそれぞれ采女に五帝龍をませたとされている。この『篋篋内伝』にある盤古とその子の五大龍王の物語は、鎌倉後期の『塵滴問答』や南北朝期の『神道雑々集』という中世の雑書や神道書にも見られる⁴⁰。

VI. さらに西田長男が牛頭天王縁起を整理しているが⁴¹その中に天明四年（1784年）の神宮文庫本の「牛頭天王縁起」が収められており、病氣平癒祈願の為祭文として奉唱されたものとされる。牛頭天王について「牛頭天王奉申。又金剛自在天申。或申武答天三（王力）神。仍為盤古大王彦。為黄帝竜王孫御坐。故御母申倉女。父奉申東王父天也。故大將軍兄御坐也。」とあり盤古の彦孫、黄帝竜王の孫という事である。江戸後期にははっきりとした関係づけがなされている。

第3章 荒ぶる神々を読み解く

第1項 神事芸能からの位置づけ

列挙した事例において、土公神、荒神、五龍、牛頭天王と、荒ぶる神が盤古と関係づけられて居並んでいる。神楽に関係した荒ぶる神の位置づけについて、岩田勝は仮面異装で現われる神楽能を三類型に分類し、託宣型（Ⅰ型—託宣の舞）、悪霊強制型（Ⅱ型—祝詞の舞もしくは祭文の舞、Ⅲ型—使霊の舞）としている⁴²。Ⅰ型の託宣の舞には、信三遠の翁、花祭りの榊鬼、冬祭りの天公鬼、九州の荒神、中国山地の荒平、東北の山の神、奥三河の折居の遊びをあげている。悪霊強制型のⅡ型祝詞の舞は、祭文を読む事が悪霊強制になるとし、祭文を舞う形態を取る。現行の土公祭文を舞に仕組んだ王子舞はこれにあたる。呪者が地霊を舞踊らせ鎮める。Ⅲ型の使霊の舞は、Ⅱ型から分化したもので、「呪者が威霊の影向きを仰ぎ、その威霊が悪霊や死霊を舞い踊らせて鎮送攘却する構成をとる⁴³」とする。

この神楽能の三類型を鈴木正崇は表にし、わかりやすく示した上、この類型を神霊・死霊・悪霊の出現との対応で分析している⁴⁴。託宣の舞は神霊を対象とし、祝詞の舞は死霊や悪霊を対象とし、使霊の舞は「神霊や使役霊と一体化した法者が「神のつかわしめの法者」となり、その威霊によって、死霊や悪霊が身体を踏されて浄化、攘却され、憑祈禱の芸能化の様相が顕著になる。」⁴⁵とする。さらに荒神信仰の社会的文化的背景について分析を行ない、1. アラカミとしての荒神は、畏怖される土地神や地霊である。2. 荒神と土地の結びつきが絆として長く継続した。3. 荒神信仰が鉄との関わりを持つ。4. 焼畑と関連し、供儀として牛が見える。5. 荒神には作神信仰が強く、特に畑作の麦の収穫を感謝する。6. 社会関係の違いが荒神の性格に差異を生むと複合的に考察する。

岩田勝は、中国山地の荒神神楽を分析し、荒神の二面性を指摘し、「他界から訪れて託宣をもたらす荒神の守護霊としての面と、現世に祟りをしないように他界へ鎮送、攘却されるべき悪霊・死霊の祟り霊としての面とが、一つの祭儀の中に二様に現出する構造を取っているのである。」⁴⁶とする。

鈴木正崇は、銀鏡神楽の荒神について、「荒神は統制が効きにくい漠然たる自然の力の形象化で、憤怒の形相で問答によって鎮圧される。外部性の力が強まるのである。」とする⁴⁷。

物部村のいざなぎ流で行なわれる荒神鎮めの祭儀からも、荒神は鎮められる対象とされている事がわかる⁴⁸。

宮家準は修験道における荒神祭祀について論じているが⁴⁹、「荒神の修法は、飢餓神で障碍をもたらす荒神夜叉にまず食物を与え、邪魔をしないようにした上で（除魔）、不動法に準じて不動明王を招き（交歓）、修法者がこれと一体となって（同化）、過去、現在の障碍のもとになっている荒神を祓い、福神としての未来荒神を招いて祈願を込め供養する（獲得）というメカニズムから成っていると考えられる。」とする。また、「荒神は神道的脚色では、荒ぶる神

素盞鳴尊と結びつけられ歳神の子とされた。地方陰陽道の崇拜対象の中心である北辰や、密教における中心的崇拜対象金剛界大日如来及び降魔の働きを示す不動明王と習合させる試みも見られた。このように荒神は、修験道の教義の上では諸宗教における中心的な荒々しい崇拜対象と結びつけられているのである。要約すれば、荒神はその基調において荒魂あるいは荒ぶる神というように、激しい祟りやすい靈魂または神を指していると考えることが出来るのである。」とし、修験者は、「庶民達の日常生活の不幸を全て荒ぶる神のせいとして、自分たちが荒神を祀ることによってこれらの害が予防し得ると説いたと推定される」さらに、「病気や不幸を荒神が憑依したせいにして、自分たちがこれを落としたり逐い祓ったりすることによって不幸を除去することが出来ると説きさえた。」とする。

牛尾三千夫は、荒神について、「一家の祖先を祀ったのが最初の形態」とする⁵⁰。祭りでは祖霊の神がかりの「荒神遊び」と祖霊本山荒神に加入を許された新霊達の神がかりである「荒神の舞納め」が行なわれ、東西の柱に引き延べられる龍蛇は新霊の象徴と考えている⁵¹。

鈴木正崇は荒神神楽について優れた論述を行っている⁵²。「荒神は一族の祖霊、土公神は家の祖霊とのつながりを持つという想定もあながち否定できない」とする。荒神神楽の王子舞は土公祭文を演劇的に仕組んだものであり、土公祭文の内容から社会関係及び文化秩序に関して分析を進めている。

岩田勝は、土公祭文について、その原型と見る中世の『五龍王祭文』（廿日市市山田家蔵）を分析し、文撰博士が事実上の主役で呪者であり、龍は祟る地霊として祀られるよりも体よく鎮められるべき性格が強かったが、5人の王子として人体をとるに至って次第に守護霊に変身させられ、これと相応して土公は土公神に変化したと考えている⁵³。

岩田勝は、平安に祈雨の為五龍祭が行なわれ、茅草で龍形が作られ、池中の島の龍穴に埋めら

れたが、これは五龍王を地下の通路の龍穴から鎮送したのであり、基型としての五龍王の姿であると分析している⁵⁴。五龍王は、「五龍王になりきった巫者たちが五方に祭文を舞うようになると五龍王の人体化は、いきおい王子五人の姿に見えはじめたはずで、王子五人が舞い踊るのを氏人たちは大いに激しかれと真剣に期待したはずである。祟りをする地霊であるがゆえに、はたものとして攘却するのではなくて、呪言や印呪で駆使することによって舞い踊らせ、それによって鎮め、秩序の回復を期待したのであった。」とし神事芸能化を説明する⁵⁵。

岩田勝は、いつ顕現するかわからない靈威は、地中から地上に湧出るとされ、これが地霊の類であり、荒神であり、五龍王、地神、土公、堅牢地神、三宝荒神、竈神等様々な顕われ方をし、いずれも蛇形を取ると説明をする⁵⁶。この地霊の祀り鎮めの様々な様態は、呪者の呪的な力による祟り霊の悪霊への強制であったとする⁵⁷。

神事芸能において、祭祀を主とする性格から、外から来る疫病等に対する場合には、外来の荒々しい神々を利用するのが一番効果があると考えられ、荒ぶる神々に対して唱える祭文に盤古をはじめとする中国起源の神々を加え、姻戚関係にあるとしたのではないかと推測する。

第2項 外来の神々の役割

三隅治雄は、鎮魂祭について論じた中で、園韓神社の祭神は地主神で、「もともと朝鮮半島から渡来した帰化人秦氏の奉戴した外来神で、日本人の感覚からすれば遠来の常世神である。こうした遠い異郷からはるばる渡来してくる神は、神威も絶大だと信じられたから、天皇の鎮魂にこの地主神の参加は何より必要だったわけであろう。」⁵⁸としている。外来の神は威力が大であり、威力が大なる神は外来から来たのだと考えられるようだ。

今堀太逸も「疫病と神祇信仰の展開」⁵⁹で「日本において疫病などの予防と対策としては、このような異国の神々（鐘馗・天刑星）に祈願す

る他はないと考えられていたのではないだろうか」としている。日本に入ってくる未知の疫病に対応する為に渡来系氏族の伝承を取り入れ、荒々しい神々の力を味方に付け利用しようとしたのではないだろうか。

『延喜式』巻8「祝詞」には、呪術的詞章のヨゴト（寿詞）と祈祷の詞章のノリト（祝詞）が掲げられている⁶⁰。土橋寛によれば祝詞（ノリト）は精霊を対象とする霊鬼呪術から発達し、精霊（神）に対する強制的な呪言だとする。その例として「遷却崇神」（崇神をうつしやる）の祝詞をあげて内容を説明している。

「遷却崇神」の祝詞については、青木紀元『祝詞全評釈—延喜式祝詞中臣寿詞』⁶¹に翻刻され評釈されている。解説によれば、「遷却崇神」は臨時祭の祝詞で、四時に祭りを行ない災いをなすものが都へ入らないように未然に防止を計るのだが、この場合は、一旦入ってしまった人に祟りをなし災いをもたらす崇神をその時に臨んで、何とか都から出ていって貰おうとするのだとされる。疫病、地震、火災、落雷等の災禍や異変等は祟りと考えられ、「祟りのもとをなす神は恐ろしく、下手に手向かいできないので、上手になだめすかして、都から遠く離れた山野へ遷し遣ってしまおうと計っている。」とする⁶²。

「遷却崇神」祝詞の内容は、まず神話が述べられ、天つ神の神謀りから天孫降臨に至る過程があり、ここまでの詞章は大祓を受けているとされる。さらにこの安国平らかに治められている国にやって来た皇神等（祟り神達）に対して、種々な奉納の品を並べ立て、受納した上猛々しい振る舞いをせず、山川の広く清らかな遠いところに移って静まるようにお祀りすると説明をする。供物によって満足して頂き、戦いを避け自分たちのテリトリーから退却して貰おうと、実に平和的な方法で崇神をやり過ごそうとしている。崇神に対して強制的な呪言というよりも、奉った呪言といえる。ただ神話を語る部分は、国の成り立ちや秩序のもとを示す意味で、祟り神に知らしめす意味があると思われる。

第3項 龍王の流入

平安期、土公の四時の所在を犯せば、陰陽師によって土公祭が行なわれ、密教の修法にも鎮土法・地鎮法があった⁶³。

また中世には荒神は一切の障碍をなし、貧窮・飢渴をあらしめる存在なので、これを祀り鎮めることで、荒神の三毒を転じて三宝となすとされ、三宝荒神の理解がされていた⁶⁴。

岡田荘司も平安末期頃成立していた陰陽道祭祀八八をまとめ、土公祭、大將軍祭、大荒神祭、大土公祭、五龍祭、三宝荒神祭等を挙げている⁶⁵。中でも五穀を祈願する祈雨の国家祭祀として五龍祭が行なわれている事と、鎮めの祭りとして大將軍祭、土公祭が行なわれている点が注目される。陰陽道祭祀儀礼は祓と鎮めを中心とし、神道儀礼は祭りと禊祓と齋みを三要素とするとする。

村山修一によって、陰陽道の祭りで読まれる祭文の都状の影印が紹介され、その翻刻も試みられているが⁶⁶、その内若杉家蔵史料『足利義満三万六千神祭都状』は明德四年（1393年）6月8日の祭文とされ、多くの神々が招聘されている中、東海南海西海北海中海の龍王の名を見る事が出来る。また東方青龍王、南方赤龍王、西方白龍王、北方黒龍王、中央黄龍王がそれぞれ36,000の眷属を引き連れているとされている。

奥野義雄は、現行の祭祀で読み上げられる祭文を紹介しているが⁶⁷、奈良県田原本町の結鎮祭の祭文は、「謹請東方青躰竜王、謹請南方赤躰竜王、謹請西方城躰竜王、謹請北方黒躰竜王、謹請中央黄躰竜王」とあり、桜井市鹿路の綱掛祭の祭文には、「謹請東方青帝竜王、謹請南方赤帝竜王、謹請西方白帝竜王、謹請北方黒帝竜王、謹請中央黄帝竜王◇各々皆来入就坐謹牛頭天王神婆利妻女八大王子等諸眷族八万四千五十四神等謹請蘇民将来」の詞章がある。桜井市の綱掛祭では、弓射ち神事が蛇形の綱に向かって行なわれるという。この事例からは、鎮めの祭りに五龍王が呼び出されている点で興味深い。

『篋篋内伝』の影響か、祭文中には牛頭天王の名も見え、また中国地方神楽でもおなじみの蛇体も祭儀に現われてくる。

龍王は中国からもたらされたと考えられるが、中国において龍王に係る儀礼が中心的位置を占めるとされる⁶⁸、道教經典の『洞淵神呪經』をとりあげる。20巻本の内巻1から巻10までの前半10巻は、5世紀に成立し、巻11から巻20までの後半10巻は、六朝末期ないし隋唐以降に増補され、悪鬼退散の經典と考えられている⁶⁹。中でも龍王の祭祀に関しては巻13、17、18に見える。この儀礼の中で読誦される「太上洞淵召諸天龍微妙上品」（巻13）は「東方青帝青龍王、南方赤帝赤龍王、西方白帝白龍王、北方黒帝黒龍王、中央黄帝黄龍王」からはじまり、数々の龍王の名を連ねる⁷⁰。同様に「召諸天神龍安鎮墓宅品」（巻17）にも種々な名の龍王が見える。この經典を用いた祭儀は、家や穀倉の守護、請雨、悪鬼を祓い清める為に行なわれる。

山田利明によれば、經典の読誦を専ら実践した集団があったとされる⁷¹。こうした中国の經典や信仰する人々の影響が日本の五龍祭文にも及んでいると考えられる。

龍王はいつの間にか、盤古と関係づけられ、その子供と解釈されるようになり、外来起源の神々が日本に定着していったのである。

日中の祓い清めの儀礼と読誦される詞章の例からは、荒ぶる神々を祭りの場に呼び出し、供物でもてなし、味方に付け、その荒ぶる力をプラスに利用して、邪悪なものが祭りの場に侵入しないようにまた邪悪なものを退治して貰い安寧が得られるようにと目論まれている事が伺える。見えない邪悪なものに対応できるのは、強いパワーを有する不安定な鬼神であり、毒は毒を以て制すると考えたのであろう。祀り方次第ではプラスにもマイナスにも変わるような鬼神ともうまくつき合って、自分に利するようしようとするのである。人々は自分の意図によって都合良く適切な神を選んで祭りの場に呼び出しているのではないかと考えられる。祭りは神のための祭りでありながら実は人々が主体であ

り、人々と神との関係を確かめる場であるといえる。ここに東アジアの神とのつきあい方が伺える。

注

¹ 「大和國高取領風俗問状答」『日本庶民生活史料集成』第9巻—風俗— 三一書房 1969年 pp.627-628

² 神格の同一視が重ねられた事が、松前健「祇園牛頭天王社の創建と天王信仰の源流」『角田衛博士古稀記念古代学叢論』1983年で述べられている。

³ 武井正弘「奥三河の神楽・花祭考」『修験道の美術・芸能・文学（I）』名著出版 1980年 p.456で指摘している。

⁴ 岩田勝『神楽源流考』名著出版 1983年 p.109

⁵ 岩田勝『神楽源流考』名著出版 1983年 pp.201, 495-498

⁶ 岩田勝『神楽源流考』名著出版 1983年 4章 盤古から父盤古大王へ pp.166-205

⁷ 『日本庶民生活史料集成』第17巻—民間芸能— 三一書房 1972年 pp.121-123

⁸ 西岡陽子「対馬の荒神祓い」『藝術』11 大阪芸術大学紀要 1989年 pp.66-73に祭文の大約が報告されている。対馬での宗教者の活動については、渡辺伸夫「対馬の命婦と法者—神楽と祭文の世界—」『東西南北』和光大学総合文化研究所 2001年、鈴木正崇『祭祀と空間のコスモロジー—対馬と沖縄—』春秋社 2004年 pp.23-358に詳しい。

⁹ 『日本庶民文化史料集成』第1巻—神楽・舞楽— 三一書房 1974年 pp.275-277

¹⁰ 岩田勝『神楽源流考』名著出版 1983年 pp.100-104 原文はpp.106-109に紹介されている。

¹¹ 岩田勝『神楽源流考』名著出版 1983年 pp.192-194 原文は岩田勝『中国地方神楽祭文集』三弥井書店 1990年 p.116

¹² 『日本庶民生活資料集成』第17巻—民間芸能— 三一書房 1972年 pp.379-386

¹³ 『日本庶民生活史料集成』第17巻—民間芸能— 三一書房 1972年 pp.386-390

¹⁴ 岩田勝『神楽源流考』名著出版 1983年 p.198

¹⁵ 岩田勝『神楽源流考』名著出版 1983年 p.200

¹⁶ 『日本庶民生活資料集成』第17巻—民間芸能— 三一書房 1972年 p.9 民間神楽の解題

¹⁷ 山本ひろ子『変成譜—中世神仏習合の世界』春秋社 1993年 p.144

¹⁸ 芸能史研究会編『日本庶民文化資料集成』第1巻—神楽・舞楽—「備後弓神楽祭文集」pp.231-239

- ¹⁹ 岩田勝『中国地方神楽祭文集』三弥井書店 1990年 pp.125-175
- ²⁰ 牛尾三千夫『神楽と神がかり』名著出版 1985年 p.320
- ²¹ 田中重雄「五行祭」『備後神楽—甲奴郡世羅郡を中心に—』八幡神社 2000年 pp.165-197、その他東城町教育委員会『比婆荒神神楽』1982年の「王子舞」pp.366-406にも台詞が収められている。
- ²² 田中重雄「五行祭」『備後神楽—甲奴郡世羅郡を中心に—』八幡神社 2000年 pp.165-197
- ²³ 岩田勝は「備後の家祈祷と土公祭文」『神楽源流考』名著出版 1983年 pp.229-253で紹介している。全文は東城町教育委員会『比婆荒神神楽』東城町文化財団協会 1982年 pp.653-658頁に収められている。
- ²⁴ 岩田勝「備後の家祈祷と土公祭文」『神楽源流考』名著出版 1983年 p.238
- ²⁵ 東城町教育委員会『比婆荒神神楽』東城町文化財団協会 1982年 pp.659-689
- ²⁶ 渡辺伸夫氏より影印を提供して頂き、筆者が文書の翻字が出来ない為翻刻は石井日出男氏等にご指導をお願いした。
- ²⁷ 『いざなぎ流の宇宙』展示解説図録 高知県立歴史民俗資料館 1999年 pp.12-13 半田文次本「大土宮神本地」の要約
- ²⁸ 高木啓夫『いざなぎ流御祈禱の研究』高知県文化財団 1996年 p.245
- ²⁹ 村山修一『日本陰陽道史総説』塙書房 1981年 pp.330-340
- ³⁰ 『日本書紀神代抄』国民精神文化研究所 1940年 p.81
- ³¹ 出村勝明『吉田神道の基礎的研究』神道史学会 1997年、西田長男『日本神道史研究』第五卷 中世編下 講談社 1979年に詳しい。
- ³² 『中国神話伝説大事典』大修館書店 1999年 盤古の項
- ³³ 吉田兼俱『中臣菰抄』『吉田叢書吉田神社編集』第4編 叢文社 1977年
- ³⁴ 脇田修『河原巻物の世界』東京大学出版会 1991年 p.6
- ³⁵ 壽岳章子『日向庵抄物集』下巻 清文堂出版 1987年 p.404
- ³⁶ 脇田修『河原巻物の世界』東京大学出版会 1991年 pp.6-7,244-246 訳文は「職人由來書」『日本古典偽書叢刊』第3巻 現代思潮新社 2004年 p.227による。
- ³⁷ 脇田修『河原巻物の世界』東京大学出版会 1991年 pp.8,195
- ³⁸ 脇田修『河原巻物の世界』東京大学出版会 1991年 pp.247-256
- ³⁹ 塙保己一編 『続群書類従』第31輯 上 続群書類従完成会 1958年
- ⁴⁰ 鈴木元「中世陰陽道の片影」『国語国文』73巻9号 2004年 pp.1~8
- 齊藤英喜『陰陽道の神々』佛教大学鷹陵文化叢書 17 思文閣出版 2008年 pp.140~197
- ⁴¹ 西田長男「祇園牛頭天王縁起の成立」『神社の歴史的研究』塙書房 1966年 pp.225-310,248
- ⁴² 岩田勝「神楽による託宣型と悪霊強制型」『神楽源流考』名著出版 1983年 pp.466-498
- ⁴³ 岩田勝「神楽による託宣型と悪霊強制型」『神楽源流考』名著出版 1983年 p.497
- ⁴⁴ 鈴木正崇「荒神神楽に見る現世と他界」『神と仏の民俗』吉川弘文館 2001年 pp.80-122
- ⁴⁵ 鈴木正崇「荒神神楽に見る現世と他界」『神と仏の民俗』吉川弘文館 2001年 p.105
- ⁴⁶ 岩田勝「神楽事における託宣型と悪霊強制型」『神楽源流考』名著出版 1983年 pp.466-498
- ⁴⁷ 鈴木正崇「神楽の構成と世界観—銀鏡神楽の体系的考察—」『仮面と巫俗の研究』第一書房 1999年 p.457
- ⁴⁸ 高木啓夫『いざなぎ流御祈禱の研究』高知県文化財団 1996年 pp.233-256
- ⁴⁹ 宮家準「修験道における小祠の祭」『修験道儀礼の研究』春秋社 1970年 pp.219-242,229
- ⁵⁰ 牛尾三千夫『神楽と神がかり』名著出版 1985年 p.270
- ⁵¹ 牛尾三千夫『神楽と神がかり』名著出版 1985年 pp.325-326
- ⁵² 鈴木正崇「神楽」『神と仏の民俗』吉川弘文館 2007年 pp.7-195
- ⁵³ 岩田勝「五龍王から五人の王子へ」「盤古から父盤古大王へ」『神楽源流考』名著出版 1983年 pp.96-205
- ⁵⁴ 岩田勝「五龍王から五人の王子へ」「盤古から父盤古大王へ」『神楽源流考』名著出版 1983年 pp.112-121
- ⁵⁵ 岩田勝「五龍王から五人の王子へ」「盤古から父盤古大王へ」『神楽源流考』名著出版 1983年 p.138
- ⁵⁶ 岩田勝「五龍王から五人の王子へ」「盤古から父盤古大王へ」『神楽源流考』名著出版 1983年 pp.136-138
- ⁵⁷ 岩田勝「五龍王から五人の王子へ」「盤古から父盤古大王へ」『神楽源流考』名著出版 1983年 p.158
- ⁵⁸ 三隅治雄「神楽と巫女舞い」『呪禱と芸能』講座日本の古代信仰第五巻 学生社 1980年 pp.150-180
- ⁵⁹ 今堀太逸『佛教史学研究』36—2 1993年 pp.1-44の18頁
- ⁶⁰ ヨゴト・ノリトの分析については、土橋寛「寿

詞と祝詞』『呪禱と文学』講座日本の古代信仰第四卷 学生社 1979年 pp.153-172を参考にした。

⁶¹ 青木紀元『祝詞全評釈—延喜式祝詞中臣寿詞』右文書院 2002年 pp.111-113,333-341

⁶² 青木紀元『祝詞全評釈—延喜式祝詞中臣寿詞』右文書院 2002年 p.333

⁶³ 岩田勝「五龍王から五人の王子へ」「盤古から父盤古大王へ」『神楽源流考』名著出版 1983年 pp.122-131

⁶⁴ 岩田勝「五龍王から五人の王子へ」「盤古から父盤古大王へ」『神楽源流考』名著出版 1983年 pp.131-134

⁶⁵ 岡田荘司「陰陽道祭祀の成立と展開」『陰陽道叢書』名著出版 1991年 pp.153-195

⁶⁶ 村山修一『陰陽道基礎史料集成』東京美術 1987年

⁶⁷ 奥野義雄『まじない習俗の文化史』岩田書院 1997年 pp.52-56

⁶⁸ クリスチーナ・モリエ「『洞淵神呪経』の祭儀の伝統—龍王の儀礼」『日本・中国の宗教文化の研究』平河出版社 1991年 pp.157-167

⁶⁹ 菊池章太「中国中世の悪魔祓いの書『洞淵神呪経』」『道教の経典を読む』大修館書店 2001年 p.128

⁷⁰ 20卷本『洞淵神呪経』『道蔵』洞玄部所収SN325 卷13 (1~3) 卷17 (3~4)

⁷¹ 山田利明『六朝道教儀礼の研究』東方書店 1999年 pp.240-244

この小論を長年にわたってご指導を賜った復本一郎先生に捧げさせて頂き、感謝の意を表させて頂きたい。